

二〇一六年は訃報が相次ぎました。四月四日に安丸良夫先生が、また七月三〇日には牧原憲夫先生が、おじくになりになりました。安丸先生は、當日頃から当館の活動を注視くださり、折にふれさまさまな意見や二助言をいただきました。また、牧原先生には、いくどもご講演をお願いし、当館の出版活動にもご尽力いただくなど、ご協力を仰ぎました。

安丸先生、そして牧原先生とのお別れにあたり、お二人と深いご親交のあった今西一氏と落合延孝氏に、追悼の辞を二寄稿いただきました。

(編集部)

〔追悼 安丸良夫さん〕

安丸民衆史の誕生

今西一

安丸先生と書きたいところだが、おそろくそう書くとは、番嫌がるのは、安丸さん本人だと思ふ。敬虔な親鸞門徒である安丸さんは、誰でも「同期同行」の人として接してくれた。それに見えて、安丸さんと呼び出して、何度話を聞いてもらったかわからない。弥生夫人に言わせると、「安

「分析家（アナリスト）安丸」というのは、見事な規定だと思ふ。私は、安丸さんは哲学青年、色川さんは演劇青年、鹿野さんは文学青年という出自の違いもあるが、色川・鹿野さんの「民衆史」が徹底して個を追求するのに対して、安丸さんは思想史を「社会的意識形態」として、歴史の「全体性」にこだわり続けたのが特徴だと考えている。

一 生い立ち

安丸さんは、一九三四年六月一日、富山県東砺波郡高瀬村森清（現南砺市森清）に、安丸藤蔵とせつさんの三男、末っ子として生まれた。ただ真ん中の次兄は、安丸さんの生まれた直後にジフテリアに感染して逝去している。安丸さんも感染して九死に一生を得たが、家族に胃潰瘍や十二指腸潰瘍の人が多く、安丸さんも子どもの頃から苦しめられていた。幼い頃から「才子多病」であったが、意外なことに子どもの頃は、暗喑の強い「軍国少年」で、敗戦の日は涙したそうである（子どもたちの八月一日「岩波新書」）。安丸家は中世から続く名家であり、二町歩ほどを耕す自作農であったが、お父さんが若い時から脊椎カリエスで丈夫ではなかったそうである。

高瀬小学校、井波中学校、福野高校を卒業して、京都大学文学部に進学する。学生時代では、生徒会や野球部をやっていた中学校時代が「一番楽しかった」と語っている。

丸を呼び出した回数、今西先生が最高ですよ」というから、ひどいことをしたものである。この四半世紀、年に二、三回は安丸さんに会って、グチを聞いてもらっていた。その安丸さんの事故と訃報を聞いて、私自身が体調を崩したほどである。その直後に牧原憲夫さんまで他界されるとは……

『現代思想』（二〇一六年九月臨時増刊号）が特集を組み、『思想』（同年六月号）や『歴史評論』（同年九月号）などに追悼記事が載っており、実に多くの人たちが安丸さんを語っている。それだけ多くの人から安丸さんは愛されていた。誰もが安丸さんの書くものに魅かれるのだろうが、誰に対してもやさしく平等に接する安丸さんの人柄が、あれだけ多くの人を引き付けていったのであろう。

私が安丸さんの「日本の近代化と民衆思想」を初めて読んだのは、一九六八年の大学一年生の時であった。この年は、全国の学園闘争、「明治百年祭」などがあり、多くの若者が大学や政治、自分の生き方などを真剣に議論していた。この時私たちは、安丸さんとともに、色川大吉、鹿野政直さんらの民衆（思想）史の研究を、むさぼるように読んだものである。安丸、色川、鹿野さんについて、キャロル・グラックさんは、「自らロマンチストであるという色川、知的なポピュラリストである鹿野、思想の分析家安丸」と、その人物論を語っている（『歴史で考える』岩波書店）。

しかし、故郷砺波地域に対しては、終生愛着と批判（男女差別、保守性）を持っていた（『砺波人の心性』安丸良夫著作集一）岩波書店）。京都に出てきた時には、「外国に来たのか」と思ったそうである。高校までは、あまり文学書などは読まず、「人間はどう生きるのか」ということを真剣に考える少年で、そこで哲学をやりたいと思つて、京都学派で有名な京大文学部に進学する。

京大の宇治分校に入学してまず驚かされたのは、同期生の早熟ぶりと多才さであった。中世史の河音能平・大山喬平さん、近代史の鈴木良さん、精神科医の中井久夫さん、農学部の吉田忠さんなど、実に多才な友人ができた。「安丸、鈴木、芝原拓自」は、後に「国史三羽鳥」と呼ばれている。宇治分校では中井・河音さんが呼びかけて、文学研究会を創り、「Agora（広場）」という同人雑誌を発行して、安丸さんらは詩や評論を書いている。もうひとつ飛鳥井雅道さんらの民科文学部会があったが、二つの団体は合併する。この時期の安丸さんの猛烈な読書ぶりは伝説となつているが、「講座派」マルクス主義者や丸山真男、大塚久雄以外には、次のような人びとの影響を受けたそうである。マルクスやウエバーはもちろんだが、ルカーチ、ゴルドマン、ルフェーブらマルクス主義の新しい展開に興味を持っていた。また日本では、社会思想として高島善哉、水田洋、内田義彦、中野徹三さんなどの主体性論の思想に学

んだと語っている。学生時代にかなり影響を受けた本には、鶴見俊輔さんの『哲学論』（創文社）があり、彼の「日常倫理学」の創設に関心を持って、第二次『思想の科学』を愛読したそうである。鶴見さんとの個人的な交流は、晩年まで続いた。

日本史では、黒田俊雄、高取正男、尾藤正英さんらの影響を強く受けている。ゼミは経済学部の堀江英一さんのゼミに出て、堀江さんを「唯一の師」と呼んでいる。堀江さんは、関西では最も精鋭な大塚史学批判の論者であった。一九五五年の日本共産党の第六回全国協議会（六全協）、翌五六年のハンガリー動乱、スターリン批判の後は、藤田省三、石田雄、神島二郎ら丸山学派のものをよく読み、六〇年安保闘争の後には色川大吉の「自由党と困民党」や『明治精神史』の影響を強く受けたそうである。

安丸さんが京大に入学した五三年には、サンフランシスコ講和・安保両条約反対闘争や京大天皇事件、破防法反対闘争などは終わっており、国民的歴史学運動も終息の時期であった。しかし、共産党の実力闘争は最盛期であり、一月には「荒神橋事件」が起こって、松浦玲さんが「放学」になっている。また五五年の六月には、滝川幸辰総長暴行事件（第二次滝川事件）で、後に親友となる芝原拓自さんが「停学六カ月」になり、大学問題の研究会を作って処分撤回を要求している。何より芝原さんと上京した六〇

ルを裂いて天皇制の本当の姿を見、どのようなヴェールにさえぎられて本当の天皇を見ることが出来なかつたかを知った時、わたくしたちは腹の底からこみ上げる憤りを感じた」という文章が始まる。

そして、「天皇神話」は過去のものとなったのではない、新時代、民主主義の仮面を被りながら天皇神話はその新しい役割を――否、全く昔と同じ役割さえ果たしている」と書かれているが、「」の部分、安丸さんによって鉛筆で抹消されている。戦後の象徴天皇制が戦前の天皇制と「同じ役割」というのは不正確と考えたのであろう。しかしこの論文では、四年前の昭和天皇の京大行幸に反対して起きた京大天皇事件を取り上げており、安丸・鈴木さんの歴史研究の原点に、京大天皇事件があったことが確認できる。井上さんは社会学の人であった。

その後、四年生の時には「ちんれつかん」一号に、「吉田松陰における尊皇攘夷思想の展開」を書いており、卒論では、「長州藩における討幕派成立の政治過程」と幕末の政治史を書いている。修士課程に進学してからは、「丸山眞男氏の方法について」（新しい歴史学のために）（第四二号）、「講座派明治維新論的方法的反省」（同、四四号）など、「方法」論にこだわった理論的研究に力を入れている。鹿野さんは、当時の京都民科歴史部会は、「方法」論ブームかと聞いている（『民衆思想史の誕生』前掲「現代思想」）。

年の安保条約反対闘争は、安丸さんの学問に大きな転換をもたらした。その後の六二年からのフォード財団の援助による京大東南アジア研究センター設置の反対運動にも参加している。これらの運動体験が、同年に「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」（『著作集五』）を書かせる原動力となった。

政治運動では、安丸さんの在籍していた頃の京大の国史研究室というのは、異常なほど共産党の勢力が強く、学部二年生の時に、一日だけ京都の北山郊外に浜里満典さん（後に同志社香里中学校教諭）の指導下で「山村工作隊」に参加したことを書いている（『戦後歴史学という経験』岩波書店）。また一九六一年に、一度だけ親友の河音さんから共産党に入党するように勧められて、断った話も書いている（『能平のアゴラ——河音能平追悼文集』自費出版）。共産党とは、生涯距離を置いた「同調者」であった。

二 「日本の近代化と民衆思想」の誕生

安丸さんの最初の論文は、二年生の時に鈴木良・井上和子さんと共同で執筆した、「共同研究・戦後の天皇制」である。京大の吉田分校自治会の発行していた『黎明』という雑誌の「河上（肇）祭記念特集号」であった。一の部分を担当しているが、「まえがき」では、「わたくしたちが歴史を学びながら「情深い天皇」や「現神人の天皇」のヴェー

スターリン批判の時代であり、「講座派」を含めてマルクス主義歴史学の最検討の時期であった。しかし修士論文『近代政治思想成立序説』（五九年春修了）では、幕末維新期の政論家・政治思想家を取り上げている。

一九六〇年は、安保闘争の年であったが、安丸さんにとってはエポック・メイキングな年であった。この年から上田正昭さんに誘われて、鈴木さんらと加わっていた大本教七〇年史の調査に参加する。芝原さんの話では、あまりアルバイトなどせず、ともかく家で本を読んでいるのが好きな院生であった。しかし、五四年頃から『中央公論』に載った「教祖列伝」の影響を受けて民衆宗教に興味を持っていたが、この仕事から民衆宗教史の研究に本格的に入り、名著『出口なお』（朝日新聞社）を生む契機となった。この年は「近世における道徳と政治と経済」という获生徂徠論（修論の一部）を『日本史研究』第四九号に発表し、芝原・鈴木さんと共同で「思想としての現代社会科学」という丸山・大塚論を書き、丸山さんの部分を担当している。そして、第一回の近世史サマーセミナーで、「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」を報告して、日本史研究会の大会でも「近代的社会観の形成」を報告している（若尾政希「解説 研究と人生のはざままで」『著作集一』）。学会への本格的なデビューで、これらの報告を聞いた人は感動しており、大きな話題になった。

しかし安丸さんは、荻生徂徠、本多利明、海保青陵、安藤昌益らの「頂点思想家」を扱った作品を、「日本の近代化と民衆思想」以前の「習作」として、「著作集」に入れることにも反対したらしいが、それぞれに力作である。安丸さんの「民衆思想」が確立するのは、菅尾さんも指摘するように、一九六三年二月の日本史研究会例会報告「近代社会形成過程における民衆意識の問題」であり、それが「日本の近代化と民衆思想」として『日本史研究』（上・下）に分載されるのは、一九六五年である。同年の「三月例会」では、「世直し」の論理の系譜が報告されている。

日本史研究会の例会報告のレジメは、菅尾さんによって公表されている（前掲「現代思想」）。それを読むと最初に長めの研究史が書かれており、「通俗道徳」という概念は使われておらず、「共同体道徳主義」という言葉が使われている。しかし、安丸さんは「通俗道徳」論の安丸と言われるのを一番嫌がっていて、「通俗道徳」は便宜的な説明概念だったとしている。ここでは少し「①学説史から」の部分を検討してみよう。

最初に「人民の問題を始めて提起した羽仁五郎の役割」として羽仁の人民闘争史が評価される。敗戦後直後の歴史学では、服部之総の幕末リマニユフアクチュア段階論などが主流で、どちらかといえば羽仁史学の評価は低かった。しかし、羽仁が「歴史の原動力を人民闘争に求めたこと、

そして、羽仁の「戦争責任論、天皇制ファシズム論」を取り上げて、羽仁の「われわれ人民民衆」の立場からの新聞・雑誌・学者・思想家の批判」に対して、大能信行は「われわれ自身が戦争をした人間であったこと、戦争の傍観者ではなく主体的な行動者であった」と批判する。羽仁の「人民民衆」は、「具体的な現実の日本の人民ではなく、まさに階級の理論によって理念化されたところの抽象的な「人民」が意味されている」というのである。ここには「大熊のベシミズム」が見られるが、この立場が、「日本人の自己批判として」、「以後の戦争責任論を主導する」としている。

最後に、丸山、神島、石田らの議論を取り上げて、「日本人の自己批判としての丸山政治学」としている。「前近代の集中的表現としての共同体」、「思想が構造化されないような構造」、「伝統を形成しない伝統」、「すべての対立を溶解する固有信仰と共同体の世界」、「天皇制ファシズムを下げから支えるもの」としての日本社会論を問題にする。丸山政治学では、「急速な近代化は群化社会、欲望自然主義、独身主義などの概念で巧みに説明される」が、「近代」を経ない大衆社会の早熟的な形成ということ」で「大衆社会論と結合」したとする。「前近代」共同体は、「近代の対極」とされ、「原始共同体的に比定」される。堀一郎やベラーナなどの議論との折衷があり、「反逆」変革のmomentの無視」

とくにそれを具体的に史料で実証したこと」を評価する。これに対して野呂栄太郎や服部は、「旧史学の影響下に、一揆・打ちこわしよりも、離村・墮胎・棄児」の消極的反抗を重じ、封建支配者相互間の闘争として政治史を「描くのとどまったとする。しかし、遠山茂樹が指摘しているように、羽仁は「百姓一揆史料の中で、とくに昂揚・蜂起の部分」を抽出し綴りあわせる手法」、「掲言すれば、民衆の日常生活↓日常意識↓意識変革の具体的過程↓変革意識」のうち最後だけを問題にするという欠点を持っている。「従ってまた、新たな生産関係の具体的存在形態は問題」にならない。これは福沢諭吉などの羽仁の思想史研究にも言える。

また、「徳川三百年間に一度しか起こらず、村によってはまるまる起こらなかった百姓騒擾の如きは、大事件だったに相違ないが、……いわばその当時の人心の動揺興奮を窺わしめる資料というに過ぎなかった。今になって考えてみると、他の残りの太平無事の二百年間の方が、我々に取って重要なのである」という柳田國男の有名な言葉を引いて、これを悪用する本山幸彦らの例はあるが、柳田や宮本常一らの「民俗学は烈々たる現実の関心をもち、しかも民衆のことは良く知っていた。民俗学と歴史学の断絶、この断絶はやがて巨大な意味をもって登場する」と予言している。

がある。結論として羽仁には、「頂点に固執し日常現実意識（か）ら革命意識への過程を捉えることができぬ」とした。他方、丸山らは「底辺に固執し、底辺の故に革命意識へ到りうるものが捉えられない」とする。

この後、報告では大原南学、報徳社、平尾在修、古橋父子、菅野八郎、田中正造、丸山教、大本教にまでおよび雄大なものであった。本当にこれを一回の例会で話したのか、と驚異を感じる。後で林屋辰三郎さんが褒めてくれたと嬉しそうに語っていた。羽仁さんらの人民闘争史の概念先行を批判し、丸山の民衆世界に「変革」の萌芽を認めない議論を否定し、ベラーナらの近代化論と対峙することから若き安丸さんは出発した。あの病弱な身体で、よく膨大な資料と新しい本を読んでこられたと思う。どうか安らかにお休みください。

（資料については、菅尾政希さんのお世話になった。）
（いまにし、はじめ／大阪大学招へい教授）